

第 21 回 「縄文時代の鼻形土製品」

上高津貝塚ふるさと歴史の広場の収蔵庫には、これまで市内で行われた発掘調査によって出土した、たくさんの遺物が収められています。これらの資料の中からは、あっと驚く資料が再発見されることがあります。今回ご紹介する資料は、神立平遺跡（神立町）の再検討によって発見された、縄文時代の鼻形土製品です。

現存する長さは 4.7cm 程度、粘土の塊を成型し、土器と同じように焼いて仕上げられています。横から見るとわかるように、鼻のあるほう（表）が凸の、弧を描いた形状をしています。一目で「鼻」とわかるくらい写実的なつくりで、鼻の孔にあたる部分は棒で丸い凹みがつけられています。鼻以外はほとんどが欠けていますが、鼻の付け根の両側と、鼻の下、言い換えれば「目」と「口」に相当する部分は、後で欠けてしまったのではなく、最初から穴が開けられています。いったいこれは何なのでしょう。

縄文時代に顔を表現した遺物としては、まず土偶（どぐう）が挙げられます。この時期の土偶は関東地方に分布するみみずく土偶か、東北地方に分布する遮光器（しゃこうき）土偶が考えられます。しかし、みみずく土偶にしては表現が写実的すぎますし、本来あるべき後頭部もありません。遮光器土偶の場合、中が空洞のつくりなので、形状としてはあり得るのですが、普通は目や口の部分を開けません。

土偶以外に顔が表現される遺物としては、人面付土器か土製仮面が考えられます。人面付土器は文字通り。深鉢形土器の口縁部や、注口土器の器面に顔が表現されるものです。また、土製仮面は、粘土でつくり、土器と同じように焼いて仕上げた仮面です。紐をかける穴が開いており、祭祀の際に額や顔に装着したと考えられています。土偶に比べて写実的な造形が多く、東北地方にみられる「鼻曲がり土面」など、変わった表情のものが多いといわれています。

神立平遺跡の鼻形土製品が、人面付土器なのか土製仮面なのか、はたまた別の遺物の破片なのかは、残念ながらわかりません。もしかしら、縄文時代の土浦市には仮面を身に着けたシャーマンがいたのかもしれない。

今回ご紹介した鼻形土製品は、5月8日から6月末日まで展示する予定です。



左) 仮面だった場合の想像図

右) 神立平遺跡出土 鼻形土製品